

諸家の意見が不一致であることを説き、次に白人熱帯移民の歴史特に西印度に於けるイギリス人の失敗に就いて記してゐる。第二部は『白人熱帯移民の地方的研究』でフロリダ、クインスランド、西印度、コスタリカ、南アメリカ、アフリカ、パナマ等に於ける幾多の實例を記し、第三部は『白人熱帯移民を左右する諸要素』と題し、人種問題、環境要素、氣候適應と健康、衣食住、政治的及び經濟的諸問題等に就いて説き、最後に結論として第一部に於て提起した三問題に對する解答を與へてゐる。即ち將來科學の進歩に伴つて、白人熱帯移民は多方面に成功を收め得るといふやうな答をすることは易しいが『不幸にして此のやうな答はあまりにも單純過ぎる』となし、北クインスランドに於ける有望な例を除いては、熱帯アメリカ及びアフリカ等に於ける白人は漸次有色人の間に吸収されつゝあり、此の白人と有色人の混血は深刻な社會問題及び生物學的の不調和を惹起しつゝあり、最終の結果が廣範圍な熱帯環境に適應した新しい人種群の出現にあるかどうかは時が解決するのを待たねばならぬが、しかし科學者の手にもなすべき仕事の多々あるを論じてゐる。

Price の研究は別に白人の熱帯移民の將來に就て特に新しい方向を見出したものではなく、また其のやうなことは甚だ困難と言ふべきであるが、豊富な實例を以て此の問題に對する解決の材料を提供してゐるところに特色がある。元來或る人種の氣候適應に關する研究には何よりも長期の組織的な觀察が必要であつて、此の點に關し我が日本に於ても或る特定の地域、或る特定の集團の

移民に就いて永久的な調査を開始する必要がある、徒らに『時の解決』を待つべきでない、と考へられる。Price の研究はかゝる場合の大きな參考となる。尙此の書の末尾には R. G. Stone が附録として主として氣候適應の生活學的研究に關する論文を四つ載せてゐる。また文獻に就いては詳細な註解が加へてある。(淺井 得一)

### 慶州南山の佛蹟

(朝鮮寶物古蹟圖錄 第二)

### 朝鮮總督府

「慶州」と言へば我々は「佛國寺」石窟庵の名を思ひ出す。そしてその事は取りもなほさず彼の秀麗々そのものの如き佛を意味するだらう。それほどまでにこの端麗にして、そのふくやかな肌のもとには温い血が脈々と流れるかと思はれるばかりの妙體が我々に近かしく親しまれるのである。(朝鮮寶物古蹟圖錄第一所收)然しこの傑作も奇蹟として忽然と現れたものではない。そこにはこの秀像に連なる幾多の傑れた佛像が當然存すべく豫想されるのである。

然るに、この古都慶州邑の南方に、磊々たる赭巖と翠嶽の間に幾多の幽谷を包んで靜かに連互する南山こそは、この新羅人の精神と信仰とをそのまゝに、數多の寺址と靈像と寶塔とを傳へて今に及ぶ聖境であつたのである。

總督府に於いては既に早く大正の末年よりこの地の調査に着手

し、以來囑托員小場恒吉氏が主としてその事に當つて苦心を重ねられたが、その成果は他方朝鮮古蹟研究會の多年に亙る調査と相俟つて、こゝに本書の公刊を見るに至つたのである。

本書收むる所の圖版百十一葉、それらに正確なる實測を記録を加へ、或は復原圖を附し、又卷末には全山に及ぶ遺跡の分布圖を加へてそれぞれの遺跡の周圍と、この聖域の全貌を髣髴するに便せしめて居る。

岡版は南北に走る本丘の西面の北端より漸次南端に及んで各谷を訪れる次第となつて居るが、殆ど谷と言ふ谷には寺址が見られ、或は倒壞せる石塔の簡明直截な直線と曲線との結合に新羅人特有の繊細な感覺を見、或はその肉厚な大まかな返り鱗のむつくりした肌を今はむなしく雨露にさらしてゐる蓮臺の繊細な内にも引きしまつた内なる力を見るにつけ、この丘麓、翠綠參差たる間に蕤を連ねたらう往時の盛んな有様がしのばれ、又これ程の藝術品を産みながら、今は hermit nation と言はるゝまでに失はれてしまつた、この新羅人の豊かな心をいたはしく思ふのである。

又、更に驚くべき懸崖聳立し、松嵐峰を渡る幽境に端然と跏坐する靈像を拜するの神祕であつて、この地にこの像を安置した新羅人の心にくさは、東海の紺碧と松緑の間に石窟庵の尊像を見出した人々の心を等しくうつものであつて我々は、これ等新羅人が如何に彼等の土地を郷土を理解し且つ愛し得た心豊かな人々であつたかを強く感ずるのである。

要するにそれ等は藝術品であると共に、又明かに一つの新羅の

歴史を語るものでなければならぬ。自由にして乏しい所謂半島國の代表的な一例とも目せられる我が半島も、實はかくまで感情豊かに、詩もあり夢もあり、郷土を愛し、又この盛な聖域を營むまでの熱烈な信仰を持つた情熱の人の住家であつた事を本書は遺憾なく遺物遺蹟を以て傳へる貴重な記録であると言はなければならぬ。

然し同時に又我々は美術史の立場からしてこれ等によつて新羅の美の性格を考へる事も必要であらうし、支那或は我國の佛教美術との關係を考へる事も必要であらう。此の場合本書の如き根本的な調査の記録が將來のかうした研究にも多大の貢獻をもたらす事を信ずるのである。

蓋しこの遺跡たる、懸崖削路相交り、流沙荆棘のはゞむ所、調査は極めて困難であつて従つて、又今日に至るまでこれ等遺跡がよく保存され得たのはあつたが、この多大の困難を押しつけてられた小場恒吉氏始め調査に従はれた方々の苦心に對して我々は大いに感謝しなければならぬ。(四六四倍、圖版百十一、地圖二、解説八十七頁、昭和十五年刊)(岡田芳三郎)

彙報

西洋史讀書會

例會 昭和十五年六月十九日、午後六時半より於樂友會館本